

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年 6月25日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21432

研究課題名(和文) 男女平等社会実現を促す文化活動のコーディネーターの力量に関する研究

研究課題名(英文) competences of cultural coordinator who support realizing the equality between sexes

研究代表者

矢内 琴江 (YAUCHI, KOTOE)

早稲田大学・文学学院・講師(任期付き)

研究者番号：60732667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、フェミニズム・アートのギャラリーが出版する記録を分析し、ギャラリーの組織運営と実務を行うコーディネーターたちに求められている力量を当事者の言葉により明らかにし、男女平等と多様性の視点から文化活動を組織運営するコーディネーターの社会的意義について理論的根拠を提供することであった。本研究で明らかになったコーディネーターに求められる力量とは、第一にアートにおける性差別構造を分析する力、第二に女性たちやマイノリティの創作活動そのものに内在する創造性を引き出す力、第三に先の2点のふまえながら作品展やイベントをコーディネートする力、第四にコミュニティの組織学習をコーディネートする力である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to give theoretical bases of the statutory values among coordinators who animate cultural activities from the point of view of equality between the sexes and realization of the respect of diversity. With this intention, research considered the analysis of the documents published by an art gallery feminist and clarified of competences that these coordinators developed in their practices. We can note like competences such as that to analyze an unequal structure between the sexes in art, that to discover the creativities of the women or the marginalized people, that to organize exhibitions or events in a feminist prospect and diversity, and that to coordinate a organizational learning in a community. These competences made it possible the coordinators to support the cultural activities of people with an aim of carrying out an equality between the sexes and the respect of diversity.

研究分野：社会教育

キーワード：フェミニズム・アート コミュニティ ケベック 組織学習

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) フェミニズム・アートの教育的可能性

今日の社会は一見男女平等に見えるが、女性に対する暴力、ワークライフバランス、貧困問題など様々な課題があり、その克服には制度的変革とともに、男性中心主義的文化の変革、女性と男性の双方における意識変革が不可欠だ。

フェミニズムは、女性たちが、個人的かつ集団的にジェンダー問題を批判的に捉える意識を獲得していきながら、政治レベル同時に日常レベルにおける性をめぐる支配的な関係を変革していくプロセスを生み出してきた (Dumont & Toupin 2000)。特に、フェミニズム・アートは、フェミニズムの観点からの美術史の見直し、美術批評、創作活動に取り組んできた (千野 2010、香川 & 小勝 2007、若桑 2001)。そのため、従来のフェミニズム・アート研究は、美術史や表象メディア論が中心だった。しかし、フェミニズム・アートは、女性アーティストたちによるオルタナティブな活動も生み出した。これは、女性たちの意識化と文化創造の当事者としての主体回復、孤立化する女性たちの関係づくり、相互的学習の場の提供に貢献してきた。また、セクシュアル・マイノリティや、様々な人種・民族の文化の価値を尊重し文化の創造を促した。そこで、申請者は、フェミニズム・アートが、男女平等と多様性の視点から、様々な世代と多様な状況を生きる女性たちの批判的意識と創造的思考を育む、教育的可能性をもつものとして捉えている。

### (2) フェミニズム的観点からの教育実践

フェミニズム教育論として、ベル・フックスは、パウロ・フレイレの意識化アプローチの影響を受け (Freire 1996)、フェミニズム教育実践をより効果的に行うには、教育実践者自身が、自らの実践や言葉に内在する差別意識を自己省察的に捉え、学生との対話的関係を通して、支配的関係そのものを組み替えていく必要を説いた (hooks 1994)。しかし、フレイレやフックスは、省察的实践を支える具体的な諸条件そのものは明らかにしていない。一方で、組織学習論は、教育実践者の力量形成には、実践の省察を支える視点や、思考や対話のプロセス、それらを可能とする諸条件とシステムを明らかにすることに貢献してきた (Schön 1983)。

申請者は、平成 24・25 年度福島県男女共生センター公募型研究事業にリサーチ・アシスタントとして携わり、男女共同参画社会実現の視点から、対人支援職従事者の組織学習づくりに取り組んだ。この研究事業を通して、多様な領域で実践する職員たち自身が、自らの実践を語り (ラウンドテーブル) 文字として記録化するという取組 (実践記録作成) が、職員の力量を可視化することに有効であることを確認した。すなわち、災害があらわにしたジェンダー問題に根差す課題を克服し

ていく実践的な知が可視化されることを確認した。

以上のことから、申請者は、フェミニズム・アートの教育的可能性に着目し、その実践に内在する知を明らかにすることが、男女平等と多様性社会実現を促す文化活動の展開を促すと考える。

そのためには、実践者自身による実践の省察のプロセスの言語化が不可欠だと考える。

#### 参考文献

- ・熊倉敬聡・千野香織編 (1993) 『女? 日本? 美? 新たなジェンダー批評に向けて』、東京、慶応義塾大学出版会。
- ・千野香織 (2010) 『千野香織著作集』、ブリュッケ。
- ・Dumont, Micheline et Toupin, Louise (2003), *La pensée féministe au Québec Anthologie 1900-1985*, Montréal, les éditions du remue-ménage, 741 p.
- ・Dumont, Micheline, (2009), *Le féminisme québécois raconté à Camille*, Montréal, les éditions du remue-ménage, 248 p.
- ・Freire, Paulo (1996) *Pedagogy of the Oppressed*, Penguin books.
- ・hooks, bell (1994), *Teaching to Transgress: Education as the Practice of Freedom*, Routledge. (邦訳: ベル・フックス (2006) 『とびこえよ、その困いを 自由の実践としてのフェミニズム教育』、里見実監訳、新水社、254 頁。)
- ・香川檀・小勝禮子 (2007) 『記憶の網目をたぐる アートとジェンダーをめぐる対話』、東京、彩樹社。
- ・Schön, Donald, (1984) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*, San Francisco, Basic Books. (邦訳: ドナルド・A. ショーン (2009) 『省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考』柳沢昌一・三輪建二監訳、鳳書房、434 頁。)

## 2. 研究の目的

本研究では、従来のフェミニズム・アート研究、フェミニズム教育論では焦点が当てられてこなかった、フェミニズム・アートのオルタナティブな活動、特にギャラリーを組織運営するコーディネーターやボランティアたちに着目する。申請者は、カナダ・ケベック州モントリオール市にあるフェミニズム・アートのギャラリー、ラセントラル/ギャラリー・パワーハウス (La Centrale/ Galerie Powerhouse) に着目し、研究を続けてきた。本ギャラリーは、1973 年に設立され、北米で最も古い、女性アーティストたちによって自主運営されてきたギャラリーである。現在、カナダ、ケベック州、モントリオール市から助成金をうけて運営している。女性たちやセクシュアル・マイノリティのアーティストたちの創作活動のサポート、展示活動の場の提供とともに、アーティストたちによる教育活動と出版活動を行ってきた。ケベック州におけ

る女性アーティストやアーティスト・ラン・センターのネットワーク形成にも貢献し、現代アートの重要な拠点であるモントリオールの文化において、フェミニズムの視点を導入する中核的な組織でもある。申請者は、これまでに、ギャラリーの出版活動と展示活動の関係が、コミュニティの実践と省察の往還を可能にし、コミュニティのフェミニズム思想形成に貢献してきたことを明らかにしてきた。本研究では、ギャラリー・パワーハウスの組織運営、事業企画、教育活動の企画運営を行うコーディネーターたちに求められている力量を、当事者の言葉によって明らかにする。当事者によって実践を省察し記録化していくことで、実践の中の暗黙知を引き出すことが可能となる。これにより、男女平等と多様性を尊重し合う社会を構築する観点から、女性をはじめ、多様な市民の文化活動を支えるコーディネーターの社会的意義について理論的根拠を提供する。

### 3. 研究の方法

本研究では、コーディネーターに求められる力量に関して、ラサントラルが出版する記録に着目して、記録の翻訳と実践分析研究を行なった。本研究において、主に実践分析の対象としたのは、1990年から2012年までに出版された記録である。

・ Fraser, Marie, et Lesley Johnstone (dir.), *Instabili: la question du sujet* (『定まらない - 主体の問題』), Montréal, Artexte, 1990.

・ Racine, Danièle (dir.), *Trans • mission: La Centrale 1996. Transmission de l'héritage des femmes en arts visuels* (『トランス・ミッション - 1996年のラサントラルヴィジュアル・アートにおける女性たちの遺産の継承』), Montréal, Artexte, 1996.

・ Gauthier, Anne (dir.), *Textura: L'artiste écrivain* (『テクスチュラ - 書くアーティスト』), Montréal, les Éditions du remue-ménage, 2000.

・ La Centrale, *Les Centrelles* (『レサントレル』), Montréal, les Éditions du remue-ménage, 2004.

・ Pourtavaf, Leila (dir.) *Féminismes électriques* (『フェミニズム・エレクトリック』) Montréal, les Éditions du remue-ménage, 2012.

以上の記録を、ギャラリーの展開と、ギャラリーのコーディネーター（場合によってはボランティアやアーティスト）がその展開の中で果たした役割を分析することにより、コーディネーターに求められる力量と、その力量形成の場を解明する。

### 4. 研究成果

以下では、本研究から明らかになった事柄の概要を説明する。

#### (1) フェミニズム・アートのギャラリーにおける記録の役割

まず、ギャラリーの長期にわたる実践の記録を分析することにより、記録は単なる活動の報告や備忘録となっているのではなく、コミュニティの学習を支える方法としての役割をもっていたことがわかった。その機能としては、第1にコミュニティの歩みを跡づけ、さらなる展開に向けての方向づけを行うこと、第2に共同体による継続的な思考を維持することであった。さらに2つ目の役割は、フェミニズム・アートの展開を支えるメディアとしての役割であった。その機能は、第1に作品を評価する言語を獲得することにかかわり、第2に新たな創造性を構築することにかかわるものであった。

#### (2) コーディネーターに求められる力量

記録から読み取ることの出来た、コーディネーターの力量とは、第一にアートにおける性差別構造を分析する力、第二に女性たちやマイノリティの創作活動そのものに内在する創造性を引き出す力、第三に先の2点のふまえながら作品展やイベントをコーディネートする力、第四にコミュニティの組織学習をコーディネートする力であった。このような力量の発揮を通して、女性や様々なマイノリティの文化活動を支え、地域のより豊かな文化的創造を支援していることを明らかにした。

なお、こうしたコーディネーターの力量のギャラリーでの作品展の企画・運営における発揮のされ方については、「女性たちの活動を支える知の生成 カナダのフェミニズム・アートのギャラリーを事例にして」(矢内、2016)にまとめた。同論文では、ラサントラルで実施されているが、作品展プロジェクトを一般公募していることを取り上げ、その審査の基準が、コーディネーターたちの熟議を通して行われていること、その熟議の営みがラサントラルというコミュニティの形成自体を支えていたこと、すなわちラサントラルというフェミニズム・アートの場を形成することにつながっていたことを指摘した。さらに、こうした作品展の評価の方法として記録が機能していたことも指摘した。すなわち、記録を構成するテキストのジャンル・実践領域・論者の立場などの多様性が、様々な角度で捉えたり、異なる文脈に置き換えて作品展のもつ可能性を引き出すことを可能にしているのである。以上のような作品展プロジェクトの選考の基準や、作品展の評価の営みが、多様な現実を生きる女性たち一人一人の、またラサントラルというコミュニティの創造性を支えているのである。

#### (3) コーディネーターの力量形成の場

以上をふまえて、本研究では、男女平等社会実現を促すコーディネーターの力量を解明するために、ラサントラルの記録に着目して実践分析研究を行ってきた。それにより、コーディネーターは、単に作品展やイベント

を企画運営する実務者的な能力や、ギャラリーを運営するマネージャー的な能力以上に、女性たちや、様々なマイノリティの多様な創造性を共同で育て合い高め合っていくコミュニティの形成を支える組織学習の支援者的な力量を発揮していたと言える。

このようなコーディネーターの力量形成の場としては、以下の3点をあげることが出来る。第一に、話し合いを中心とした民主的運営体制に基づくラサントラルの日常業務である。この日常業務の経験そのものが、コーディネーターたちにとって、意識化の機会となっていたことが記録の中に記されている。第二に、コーディネーターやボランティア・メンバーを対象とした様々な研修である。特に、2007年以降のラサントラルは、ギャラリーにおけるダイバーシティの推進を進めており、セクシュアル・マイノリティとマネジメントに関わる研修や、多様な言語に関わる研修などを実施していた。第三に、記録である。記録は、40年にわたるラサントラルが実践を通して培ってきた知を、様々な世代のコーディネーターをはじめ、ラサントラルの様々なメンバーたちに伝えるとともに、世代を超えて、フェミニズム・アートの社会的使命について組織的に考察し続ける役割を担っている。このように、ラサントラルのコーディネーターの力量は、コミュニティの実践の展開の中で形成されてきたものだとと言えるだろう。

最後に、こうしたコーディネーターの育成にとって、ラサントラルの場合、ラサントラルだけが学習の場であったのではなく、高等教育機関もその役割を果たしていたことを指摘したい。メンバーが大学院に行き修士論文や博士論文の研究を通して、ラサントラルが生成したフェミニズムを検証するということも行ってきた。このように、高等教育機関が継続教育の場として果たす役割は重要だと言える。

以上の分析を進めていく過程で、本研究では、ラサントラルが出版した『フェミニズム・エレクトリック』(2012年)を全ページ翻訳し、成果報告書に研究成果として掲載した(矢内琴江『2014-2017年度科学費若手研究(B)男女平等社会実現を促す文化活動のコーディネーターの力量に関する研究成果報告書』)。この翻訳の意義は、フェミニズム・アートのギャラリーの記録としての記録のみならず、日本にとっては、今日、LGBTQの人権問題に関して、様々な組織で改革が進められている状況に対して、アートの活動を支える組織の事例ではあるが、多様性の尊重の実現に向けた具体的な事例やコーディネーターの働きを読み取ることが出来ることだと言える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

矢内琴江(2016)「女性たちの活動を支える知の生成 カナダのフェミニズム・アートのギャラリーを事例にして」、小林富久子・村田晶子・弓削尚子編『ジェンダー研究/教育の深化のために 早稲田からの発信』、彩流社、157-178頁。

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

矢内琴江(YAUCHI KOTOE)

早稲田大学・文学学術院・講師(任期付)

研究者番号: 60732667